

# プロフェッショナルの肖像

Vol. 5

プロはテレビの中にだけいるわけではありません。医療という不確実な仕事の現場で、常に結果を求められ、それに応えるべく日々研鑽を積んでいる長崎医療センターの医師に訊きます。  
聞き手：小森敦正（難治性疾患研究部長）

## 黒木 保（外科治療研究部長）

第5回目は、黒木 保外科治療研究部長。  
宮崎県門川町出身。平成4年長崎大学卒。同年第二外科（現移植・消化器外科）入局。  
平成28年より長崎医療センター勤務。専門は肝臓・胆道・膵臓外科および内視鏡外科。再生医療、分子生物学、新しい手術手技の開発等幅広く活躍。

### 医師を目指した動機を教えてください。

実は子供の頃身体が弱く、小児喘息で通院がかかせない、病気がちの子でした。よく喘息発作で夜間、隣町（延岡市）の開業医の先生に診察してもらうことが多かったのですが、吸入をするとあっという間に治り、すごいなと思っていました。物心ついてなりたい職業が医者以外になく、小2の文集に“お医者さんになりたい”と書いていましたね。高校生のころ医者以外の職業も考えようかなと母に相談したら、小2の文集をもってきて“最初にもった夢をあきらめていいの？”ともいわれました。（笑）

### 外科を志望した理由は何ですか？

医学部4年生までずっと小児科志望でした。しかし、臨床の先生を見ていると、外科系の先生がかっこよみえ、6年生まで脳外科に形成外科等色々悩んだ結果、最終的に一般外科を選びました。決め手は2つあります。命に関わる仕事をしたいという思いと、長崎大学第2外科の兼松隆之先生との出会いです。当時45歳の颯爽とした兼松教授にあこがれていました。

### 外科の中でも胆膵外科を専門とされた理由は何ですか？

入局してすぐ膵臓をやりたいと思いました。消化器がんの中で最も成績の悪いのは膵がんです。いまだに、きれいに切除しても5年生存率が20%程度と予後も悪いです。それを何とかしたいと思ったのが膵臓を志したきっかけです。



熱血指導。教育の大切さは、兼松隆之先生に教わりました。

### 外科医としての目標を教えてください。

膵臓外科に内視鏡手術を導入したことは大きな仕事の1つと思っています。従来膵臓手術は侵襲が高く予後も悪いのが当然だったのですが、腹腔鏡を取り入れることにより、低侵襲となりました。今後は、膵臓の悪性疾患にも腹腔鏡をとり入れていきたいと思っています。早期がんから進行膵がんまでターゲットになります。膵がんに腹腔鏡を導入し、低侵襲できれいに取りきって、抗がん剤治療につなげていきたいというのが今の目標です。

### 本年より外科治療研究部長とされましたが、先生の研究へのスタンスを教えてください。

まずは研究が好きですね。がん分子生物学の研究に興味を持った外科医2年目の頃、兼松先生に紹介状を書いていただき、がん分子生物学研究で有名な東京大学医科学研究所の中村祐輔教授のところで研究する機会をいただきました。

た。中村先生は、“手術をして検体を取ってくるのは外科医だから、外科医はそれを利用して自分で研究しなければだめだよ”と、よく言われていました。研究をすることでそのアプローチが臨床でも生きています。がんは見えているところを取るだけではだめで、分子レベルでがんを考えないといけません。患者さんが来られた際、前もって順序だてて治療、手術のプランニングを考えていくということも、研究をすることで学べたと思います。

### AMED(日本医療研究開発機構)の研究費も獲得され、再生医療を用いた外科研究もされていますよね。

再生医療は出身の長崎大学移植・消化器外科一丸で取り組んでいるのですが、この中でも膵臓はいちばん立ち遅れています。膵移植には、膵臓移植と膵島移植がありますが、低侵襲なのは膵島移植です。しかし膵島移植は成績が悪い。膵島細胞だけを移植しても細胞はすぐこわれるので、これをなんとかかしたいと思い、細胞シートを活用して膵臓でなんとかできないかをチャレンジしています。マウスでうまくいったので、現在大動物で実験中です。私たちの研究の売りの一つは、大動物の結果をもとにヒト臨床研究のプロトコルもつくってしまおうというものです。実用化をめざして取り組んでいます。

### 先生の診療のモットーは何ですか。

必ず患者さんの背景、社会的な立場、家族関係、考え方、心情等を把握して診療にあたることです。外来・回診での患者さんとの会話を大事にしています。けっこうおしゃべりしますよ(笑)。手術の適応が難しくても、1%でもチャンスがあれば手術をうけたいという患者さんのご意思があれば尊重します。自分の信念もですが、患者さんの信念を大事にして診療にあたっています。

### 長崎医療センターに赴任されて1年半ですね。医療センターでの今後の目標を教えてください。

肝胆膵における低侵襲手術のレベルを上げて、全国どこにも負けないようにしていきたいと思います。例えば“低侵襲医療センター”などを立ち上げることも、病院の大きな特色になると考えています。

### 最後に若い先生に向けてメッセージをお願いします。

少々若手の表情が暗いのが気になってます。もっと楽しんで仕事をしてほしいですね。そして外科医として若い人が伸びるために大事なものは“素直さ”だと思っています。ぜひ素直な気持ちで色々なものに感動して、先輩のアドバイスを聞いてほしいですね。

本日は貴重なお話をどうもありがとうございました。



学生時代、ボートに打ち込んでいました。ちなみに私(後から2番目)の前で漕いでいるのは竹下先生(外科医長)です。西医体で初優勝。この写真は、全日本大学選手権です。



留学時代、妻のラボのメンバーと。長男(写真)は渡米二カ月で次男は日本へ帰る二カ月前に生まれました。



カザフスタンで腹腔鏡下膵手術。手術の師匠は現島根大学教授の田島義証先生です。



趣味のガーデニング